

The Position of Chukchi-Kamchatkan Family in the Languages of the North Pacific Rim : Testing Fortescue's (1998) "Uralo-Siberian" Hypothesis

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-12-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 呉人, 恵 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00009995

環北太平洋諸言語における チュクチ・カムチャツカ語族の位置づけ — Fortescue (1998) の ‘Uralo-Siberian’ 仮説の検証

呉人 恵

(北海道立北方民族博物館)

- | | |
|------------------------------|---|
| 1 はじめに | 4 フォーテスキュー (Fortescue 1998) の ‘Uralo-Siberian’ 仮説 |
| 2 チュクチ・カムチャツカ語族の概観 | 5 類型の特徴の検証 |
| 2.1 地理的分布, 系統, 方言分類 | 5.1 独立の品詞としての形容詞 |
| 2.2 類型の特徴 | 5.2 非定形動詞による従属節 |
| 2.2.1 音韻の特徴 | 5.3 語順 |
| 2.2.2 形態の特徴 | 6 おわりに |
| 2.2.3 統語の特徴 | |
| 2.2.4 周辺諸言語との類似性 | |
| 3 JNPE 以後のチュクチ・カムチャツカ語族の位置づけ | |

1 はじめに

本論文では、フォーテスキュー (Fortescue 1998) がウラル語族、ユカギール語、エスキモー・アリュート語族、チュクチ・カムチャツカ語族をまとめた ‘Uralo-Siberian’ 仮説の根拠として挙げている類型の特徴のいくつかを、コリヤーク語 (Koryak) に基づき検証する。

フランツ・ボアズ (Franz Boas, 1858-1942) 率いるジェサップ北太平洋探検 (Jesup North Pacific Expedition, 1897-1902, 以下、JNPE と略す) は、新旧両大陸にまたがる環北太平洋地域の先住民の人種的・文化的関係性を初めて学術的に解明するために組織された。それ以来、北東シベリアと北米の諸言語はその類似性が指摘されてきた。ボアズ (Boas 1905) は、この地域の言語関係を辿るのは極めて困難であると断りつつも、JNPE の結果、次のことが明らかになったとしている。

- (A) 北東シベリア諸語¹⁾は、形態論的にはウラル・アルタイグループとは関係がない。
- (B) 相互に密接に関係するチュクチ語、コリヤーク語、カムチャダール語は、複統合性、名詞抱合などの基本的な特徴をアメリカの多くの言語と共有する。
- (C) ユカギール語もそれほどではないにしろ、同様である。

(D) 北東シベリア諸語は、アメリカ先住民諸語と同じグループに分類されるべきである。

一方、ロシア側からJNPEに参加したウラディーミル・ヨヘルソン (Waldemar Jochelson, 1855-1934) は、他の文化的要素も含めたこのような類似性が、間氷期あるいは最終氷期にアジアから新大陸へ移住し、氷帽の拡大により南へと追いやられたヒトが、最終氷期の終わり頃、再び北上しアジアに戻って北東シベリアに住み着いた、その名残であることによると考え、これらの古アジア民族を「シベリアのアメリカノイド (Siberian Americanoids)」(Jochelson 1928: 43) と名づけた。

ところで、古アジア諸語の中でも、チュクチ語、コリヤーク語、カムチャダール語、すなわち、現在言うところの「チュクチ・カムチャツカ語族」が両大陸の言語関係を探るうえでカギとなることは、上述のボアズ (Boas 1905) の指摘からもうかがえる。それゆえ、この語族は、新旧両大陸の「要」あるいは「橋渡しをする」言語であるとも言われてきた (渡辺 1992: 149)。

チュクチ・カムチャツカ語族が、JNPE以降、北米の諸言語とどのように関係づけられ議論されてきたかについては宮岡 (1992; 2009)、渡辺 (1992) に詳しい。そこで、本論文では、それらでは言及されていないフォーテスキュー (Fortescue 1998) を取り上げ、チュクチ・カムチャツカ語族の帰属についてのより新しい議論を概観する。そのうえで、コリヤーク語のデータをもとに、フォーテスキュー (Fortescue 1998) が 'Uralo-Siberian' を考えるうえで重要だとして挙げている類型的特徴のいくつかについて検証をおこなう。フォーテスキュー (Fortescue 1998) の 'Uralo-Siberian' 仮説は後述するように、広範な地域と言語を対象とした壮大な歴史的シナリオであり、当然のことながら、その是非を論じることは筆者の能力の範囲を大きく超えている。本論文は、記述研究の観点から、類型的特徴について別の事実や解釈の余地があることを提示するに留まることを予め断っておきたい。

ところで、従来、チュクチ・カムチャツカ語族のこのような比較研究においては、チュコト半島においてエスキモー語族と隣接し、語族の中では話者数の最も多いチュクチ語と、それとは類型的性格が大きく異なり、語族への所属問題が未だに議論されている最南のイテリメン語に焦点が当てられることが多かった。一方、コリヤーク語は独自の特徴でもないかぎり、この2言語の陰に隠れてきたきらいがある。しかしながら、文化的側面からは、コリヤークには北米インディアン的要素が他の要素にも増して優勢であるという指摘 (Jochelson 1904: 415)、北米インディアンとは今でこそ遠く離れてはいるものの、過去には継続的な接触や観念の交換があったであろうとの推測 (Jochelson 1904: 425)、コリヤークのワタリガラス神話に見られる自然観が、北米北西海岸インディアン (ベラ・クーラ、トリンギット、ハイダ、ツィムシアンなど) のそれと一致するという指

摘（ベリヨスキン 2009）などもある。したがって、言語的側面からもその特徴を押さえておくことは、無意味ではないと考える。

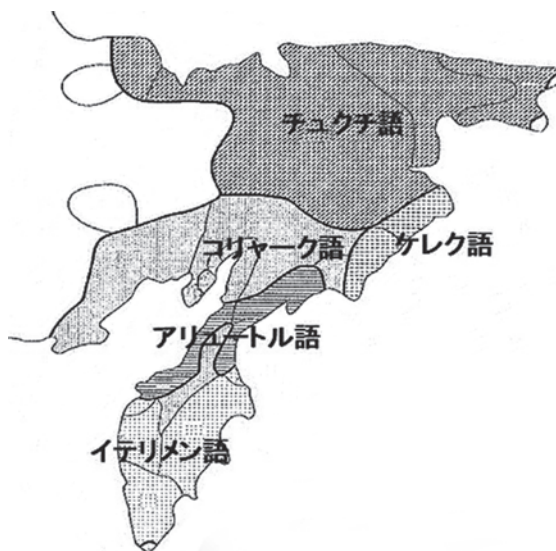
本論文の構成は、次の通りである。第2節では、チュクチ・カムチャツカ語族の地理的分布、系統、方言分類、類型の特徴について略述する。第3節では、ボアズ（Boas 1905）以降、チュクチ・カムチャツカ語族が周辺の諸言語とどのように関係づけられてきたかを宮岡（1992; 2009）、渡辺（1992）を参考にサーヴェイする。第4節では、フォーテスキュー（Fortescue 1998）の‘Uralo-Siberian’仮説を紹介する。第5節では、フォーテスキュー（Fortescue 1998）が挙げている44の類型の特徴のうち、形容詞、非定形動詞による従属節、語順を取り上げ、コリヤーク語のデータを通して、その解釈の妥当性を検証する。第6節では本論文を総括する。

なお、本論文で言うコリヤーク語とは、ロシア連邦マガダン州セヴェロ・エヴェンスク地区の内陸ツンドラに分布するチャウチュヴァン方言を指す。

2 チュクチ・カムチャツカ語族の概観

2.1 地理的分布、系統、方言分類

チュクチ・カムチャツカ語族は、北東シベリアの東端、チュコト半島からカムチャツカ半島にかけて分布する。北から、チュクチ語、ケレク語、コリヤーク語、アリュートル語、イテリメン語からなる（地図1）。アルタイ諸語が比較的新しい時期にこの地域に進出したのに対し、古くからの生え抜きの言語として、ケット語、ユカギール語、ニヴ



地図1 チュクチ・カムチャツカ語族（Fortescue 2005を基に作成）

フ語、そして、チュコト半島の先端に一部、分布するエスキモー・アリュート語族とともに古アジア諸語に分類される。

チュクチ・カムチャツカ語族のうち、チュクチ語とコリヤーク語の同系性は、クラシェニンニコフ (Krasheninnikov 1755a; 1755b) により18世紀半ばに指摘されて以来、疑いのないものとして認められている。民族的な区別さえなければ、両言語は同一言語の2方言であるとみなしてもよいほど類似しているともされる (Comrie 1981)。また、ケレク語は、1940年代まではコリヤーク語の、1950~1960年代まではチュクチ語の一方言とみなされ、その所属が長い間、確定していなかった。アリュートル語は、1960年まではコリヤーク語の一方言とみなされていたが、その後、独立の言語としてみなされるようになった (Skorik 1968; Zhukova 1968)。ちなみに、このうちケレク語はチュクチ語と、アリュートル語はコリヤーク語との類似性が高いとされる。

一方、イテリメン語は18世紀末までにはコリヤーク語、チュクチ語との類似性が注目され、チュクチ・カムチャツカ語族に属すると考えられてきた (Bogoras 1922; Skorik 1958)。しかし、その一方で、これらの言語とは相違点も多く、語族の他言語とは系統を異にする孤立語であるとする主張もある (Worth 1962; Volodin 1997)。小野 (2021: 4) は、イテリメン語の帰属問題は未解決であるという見解を取っており、語族の他言語との相違点を表1のようにまとめている。

表1 イテリメン語とチュクチ語、コリヤーク語、アリュートル語、ケレク語との相違点

	イテリメン語	チュクチ語、コリヤーク語、アリュートル語、ケレク語
音節構造	子音結合を許容	子音結合を避けるために母音を挿入
名詞・形容詞の人称標示	なし	あり
名詞項と格	S=A=O (絶対格)	S=O (絶対格), A (能格)
テンス・アスペクト表示の位置	語根の後ろ	語根の前
語幹結合 (複合語の形成)	しない	する
抱合	しない	する

(出典：小野 2021: 4)

次の (1) は、スコリク (Skorik 1958) で示されている語族の各言語間の音韻対応を示す例である (*Chu.* はチュクチ語, *Ker.* はケレク語, *Kor.* はコリヤーク語, *Al.* はアリュートル語, *Itel.* はイテリメン語の略)²⁾。なお、スコリク (Skorik 1958) では、語例はキリル文字とローマ字を組み合わせて表記されているが、以下ではすべて対応するローマ字表記に直して示す³⁾。

(1) <i>Chu.</i>	<i>Ker.</i>	<i>Kor.</i>	<i>Al.</i>	<i>Itel.</i>	
/rewəmrew/	/jawjaw/	/jewjew/	/raw/	/rewne/	「雷鳥」
/meməl/	/miməl/	/meməl/	/miləmil/	/meməl/	「アザラシ」
/qoraŋə/	/kujakuj/	/qojaŋa/	/quraŋa/	/qoz/	「トナカイ」
/numekew/	/numekew/	/jumekev/	/tumakavək/	/cilkes/	「集める」
/cakəyət/	/jakəət/	/cakəyət/	/sakəyit/	/zilatumx/	「姉妹」
/yənulin/	/nanuli/	/yənulin/	/yanulin/	/k'nukeŋin ⁴⁾ /	「それを食べた」

チュクチ・カムチャツカ語族の中で最も広い分布域と、10,000人を超える、語族のなかでは最も多い話者人口を有するのは、最北のチュクチ語である。チュクチ語は、その広い分布域にもかかわらず、東部方言（海岸定住民チュクチ方言）と西部方言（トナカイ遊牧民チュクチ方言）の2方言にしか分岐していない。なおかつ、両方言の差は小さく、音韻、形態、統語、語彙の各レベルにおいて類似性が高いとされる (Bogoras 1922)。

各言語の方言分岐は、南下するにつれ大きくなる。すなわち、コリヤーク語ではチャウチュヴァン、パラナ、パレニ、イトカン、カメン、アブカ、アリュートル、カラガの8方言が認められている (Stebnitskij 1937)。語族の中で最南に位置するイテリメン語にはさらに著しい方言分岐が見られるとされる (渡辺 1992)。北から南へと大きくなる方言分岐のありようから、チュクチ・カムチャツカ語族の故地を南に求めると同時に、チュクチ語の北への新しい拡散を示唆する向きもある (渡辺 1992)。

2.2 類型的特徴

以下では、コリヤーク語を例に、その音韻、形態、統語上の類型的特徴を略述する。

2.2.1 音韻的特徴

母音音素は /i, u, e, a, o, ə/ の6つ、子音音素は /p, t, t', k, q, v, ʧ, ʒ, ʃ, c, m, n, n', ŋ, l, l', j/ の17である (/t', n', l'/ はそれぞれ /t, n, l/ の口蓋化を表わす。/c/ の音価は [ç])。珍しい音素としては、有声咽頭摩擦音の /ʃ/ [ʃ] がある。閉鎖音は無声のみで、有声・無声の対立がない。母音音素、子音音素はそれぞれ、{I, A, U, E} という母音形態音素、{p, t, t', k, q, v, ʧ, ʒ, ʃ, c, m, n, n', ŋ, l, l', j} という子音形態音素から形態音韻規則によって導かれる。形態音韻現象として特筆されるのは、アルタイ型とは異質なタイプの母音調和である。アルタイ型の母音調和が語幹から接辞へと一方向的に及ぶのに対して、コリヤーク語では、母音の系列により語幹から接辞に及ぶ場合も、接辞から語幹に及ぶ場合もある、いわば双方向的な母音調和を示す。アルタイ型の母音調和が「相称的 (symmetrical)」であるのに対し、チュクチ・カムチャツカ語族のそれは「非相称的 (asymmetrical)」であるとして類型化されることがある (Aoki 1968)。従来、コリヤーク語の

母音調和は、チュクチ語のような規則的な母音調和からの逸脱、崩れとして捉えられる向きがあった (Bogoras 1922)。しかし、全ての形態素が基底において I, I', II の 3 系列に分かれること、異系列の形態素は表層において 1 語の中に共起できないこと、3 系列は支配力の強さにより II > I' > I という階層を成しているなど、独自の規則性を示すことが明らかになっている (呉人 2020a)。

2.2.2 形態的特徴

コリヤーク語は、膠着的な複統合的言語である (Kurebito 2017)。形態的手段としては、接辞 (接頭辞, 接尾辞, 接周辞⁵⁾), 抱合, 重複などがあげられる。語, とりわけ, 動詞は, 多くの形態素を含み, 意味的には文に相当するような一語文 (holophrase) に拡張しうる。動詞のこのような複統合性を可能にしている形態的手段は, 接辞法や名詞・動詞・副詞抱合である。動詞語幹のすぐ前後には派生接辞や抱合語幹が配置され, 屈折接辞はその外側に配置される。派生部分と屈折部分は基本的に明確に区別され絡み合うことはない。外側の屈折接辞を剥していくと, 内側の派生語幹が残る, いわゆる「玉ねぎの皮タイプの形態法 “onion skin” morphology」(Fortescue 2013: 5) を示す (呉人 2020b)。

定形動詞の構造は, 次の (2) のように図式化できる。S は自動詞主語, A は他動詞主語, O は他動詞目的語, TAM はテンス・アスペクト・ムードである。イタリック体で示したのが屈折部分, 普通体 (並字) で示したのが派生部分である。動詞語幹は太字で示す。

(2) [S/A/O/反転] [TAM] (結合価) 抱合・**動詞語幹** (結合価) 数 [TAM] [S/A/O]

(3)~(5) は定形動詞 (直説法) の例である。

(3) *mət-ku-niŋci-tku-jv-ə-ŋ-new*

1PL.A-IPFV-throw-ITR-in.a.hurry-E-IPFV-3PL.O

「私たちはそれらをあちこちに大急ぎで投げている／いた」

(4) *t-ə-ko-ja-n-**vetat**-aw-ŋ-ə-ŋ-nen*

1SG.A-E-IPFV-want-CAUS-work-CAUS-want-E-IPFV-3SG.O

「私は彼／彼女を働かせたい／たかった」

(5) *t'-ə-toja-ajɣəven'ŋ-ə-qoja-n-**omak**-av-ə-k*

1SG.S-E-new-evening-E-reindeer-CAUS-get.together-CAUS-E-1SG.S

「私は晩早くトナカイを集めた」

(3) は全部で6つの形態素からなる。すなわち、1つの動詞語幹 *niŋci* 「投げる」の後ろに反復を表わす派生接辞 *-tku* と副詞的派生接辞 *-jv* 「急いで」が接続し、そのすぐ外側に不完了を表わす屈折接周辞 *ku-ŋ*, さらにその外側の左端に1人称複数主語を表わす屈折接頭辞 *mət-*, 右端に3人称複数目的語を表わす屈折接尾辞 *-new* が配置されている。(4) も全部で6つの形態素からなる。すなわち、1つの動詞語幹 *vetat* 「働く」のすぐ前後に使役を表わす派生接周辞 *n-aw*, さらにその前後に「～したい」を表わす派生接周辞 *ja-ŋ*, さらにその前後には不完了を表わす屈折接周辞 *ko-ŋ* が配置されている。そして、左端には1人称単数主語を表わす屈折接頭辞 *t-*, 右端には3人称単数目的語を表わす屈折接頭辞 *-nen* が配置されている。(5) も、全部で6つの形態素からなる。動詞語幹に副詞と目的語が抱合された例である。ここでは、4つの自立語幹, *toja* 「新しい」, *ajyøven'ŋ* 「晩」, *qoja* 「トナカイ」, さらに、使役接周辞 *n-av* が付加された派生他動詞語幹 *n-omak-av* 「集める」が含まれる。*toja-ajyøven'ŋ* 「晩早く」は動詞語幹を副詞的に修飾する。*qoja* 「トナカイ」は動詞語幹に目的語として抱合される。これらの複合動詞語幹の一番外側に、1人称単数主語を表わす屈折接周辞 *t-k* が配置されている。

2.2.3 統語的特徴

次に統語的特徴について見る。コリヤーク語では、二重標示タイプと従属部標示タイプが混在している。すなわち、節構造では属部である名詞の側で主語と目的語の格標示がなされるのと同時に、主要部である動詞の側でも主語と目的語の人称・数が標示され、両者は一致をなすため、二重標示タイプである。一方、所有構造では、所有者名詞の側で属格が標示され、被所有者名詞の側は無標であるため、従属部標示タイプである。

名詞の格組織は能格タイプ ($S = O \neq A$) を示す。加えて、能格を絶対格に昇格させる逆受動構文、斜格名詞を絶対格に昇格させる充当相構文、所有者を絶対格に昇格させる所有者繰り上げ構文、他動詞が非他動詞化の標示を受け、動作者が削除されて被動作者が自動詞文の主語になる逆使役構文など、結合価の増減を引き起こす多様な統語的操作がおこなわれる。

語順は、動詞の側で主語・目的語の人称・数標示がなされることと関係して、固定していない。加えて、名詞項を取らずに動詞のみからなる文の出現頻度がきわめて高く、S, A, O が揃った文の出現頻度は低い。そのため、そもそも文法的な基本語順を決定すること自体あまり意味があるとはいえない（語順について詳しくは、5.3を参照）。

2.2.4 周辺諸言語との類似性

上述のコリヤーク語の音韻、形態、統語的特徴の多くは、北東シベリアにありながら、むしろ北米側の言語との類似性を示している点は注目すべきである。

まず、音韻面ではその一例として母音調和が挙げられる。コリヤーク語（チュクチ語

も)は、上述の通り、アルタイ型の相称的母音調和とは異なり、非相称的母音調和を示すが、類似の母音調和は旧大陸側にはなく、むしろ北米のネズ・パース語に見出される。ネズ・パース語では弱母音 {i₁, u, e}, 強母音 {i₂, o, a} の2系列があり、強母音が弱母音を一方的に同化させる、コリヤーク語やチュクチ語とよく似た母音調和を示す (Aoki 1968)。ただし、コリヤーク語のような3系列の母音調和は見られない。

複統合性は、北東アジアから北米にかけての環北太平洋地域が、世界的に見ても際立っている地域として知られている。この地域の複統合性は、最北端中央部に位置するエスキモー語をひとつの極として、西に北東アジア、東に北米へと行くにつれ、次第にその統合度を弱める連続的変異を成す (Fortescue 2013)。エスキモー語の西に境を接するチュクチ・カムチャツカ語族 (イテリメン語を除く) もまた、複統合的言語として知られている。フォーテスキュー (Fortescue 2013) は、この語族では、上述のように屈折部分と派生部分に絡まり合いが見られず、派生接辞が常に屈折接辞よりも語幹に近いというバイビー (Bybee 1985) の形態素配列に関する一般化を固守し、抱合が生産的におこなわれるなどの点から、比較的新しい複統合性を示すものとしている。

抱合、特に動詞語幹に名詞語幹を包含させる名詞抱合 (noun incorporation) は、北東アジア側ではコリヤーク語やチュクチ語などを除けばアイヌ語に見られるのみであるが、北米では中央部、東部、南部に密度の濃い分布をなし、北西部でも、アサバスカ語、ヤナ語、ツィムシアン語、クテナイ語などに限られた利用ではあるが見られるとされる (宮岡 1992)。

能格性は、ベーリング海沿岸地域では、チュクチ・カムチャツカ語族 (イテリメン語を除く) とエスキモー語族だけが共有する特徴である。

逆受動は、北東アジアではニヴフ語、アイヌ語にも見られるが、充当相はアイヌ語だけが共有する。むしろ北米側にこれらの構文をもつ言語が多い。

3 JNPE 以後のチュクチ・カムチャツカ語族の位置づけ

JNPE 以後、チュクチ・カムチャツカ語族が周辺の諸言語とどのように関係づけられてきたかの詳細は渡辺 (1992) に譲り、本節ではごく概略的にこれまでのチュクチ・カムチャツカ語族の北米先住民諸語との関係についての議論を押さえておく。ボアズ (Boas 1905) 以降、北東シベリアと北米の大陸を隔てた様々な言語の系統関係が議論されてきたが、チュクチ・カムチャツカ語族もその例外ではない。なかでも隣接するエスキモー・アリュート語族との関係は多くの研究者により議論された。その議論は、大きく、ボアズ (Boas 1929; 1933) やタルビッツァー (Thalbitzer 1952) に代表される影響関係説と、スワディッシュ (Swadesh 1962) に代表される同系説に分かれる。影響関係説では、この地域でチュクチ語とエスキモー語の2言語だけが形態的能格を持つ点をはじめとする

共通点がある一方で、前者は接頭辞、重複、名詞抱合、母音調和といったエスキモー語にはない特徴を有していることから、共通点は影響により発生した言語構造における混濁によるものとしている。一方、同系説の代表であるスワディッシュ (Swadesh 1962) によれば、上述のような形態法の違いは比較的新しい発展である。さらにスワディッシュ (Swadesh 1962) は、西イテリメン語、チュクチ語、アリュート語、東エスキモー語の比較を通じて、音韻体系の再構を試み、これらの言語が元々は単一の言語共同体をなしていたであろうとしている (Swadesh 1962)。スワディッシュ (Swadesh 1962) のこの結論は、いわゆる1964年の「コンセンサス分類」において「アメリカ極北・古シベリア大語族 (American Arctic-Paleosiberian phylum)」として引き継がれることになる (Voegelin and Voegelin 1965)。とはいえ、チュクチ・カムチャツカ語族の北米諸言語との関係性については、今に至るまで決着がつかないのが現状である。

4 フォーテスキュー (Fortescue 1998) の ‘Uralo-Siberian’ 仮説

環北太平洋地域の言語関係に関するその後の注目すべき新しい研究としては、マイケル・フォーテスキュー (Michael Fortescue) の一連の考察が挙げられる。フォーテスキューは1990年以前から極北地域の諸言語について、東は北米インディアン諸言語から西はウラル語族まで驚くべき広範さで研究を進めてきた。特に、ウラル語族、ユカギール語、エスキモー・アリュート語族の相互関係には早くから注目し、宮岡編 (1992) が刊行されるよりも前に、フォーテスキュー (Fortescue 1988) で、かつてユカギール語の分布域は現在よりも東西に広く、東はエスキモー・アリュート語族と隣接しており、両言語の名詞の格接辞、動詞の人称接辞の対応関係から、なんらかの関係があったことを示唆している (このことは、渡辺 (1992)、遠藤 (1992) でも言及されている)。しかし、少なくとも日本では、フォーテスキューの研究は大きく取り上げられたことはない。これには、フォーテスキューの研究のひとつの到達点である1998年の著作 (Fortescue 1998) が、日本において宮岡伯人を中心とした環北太平洋諸言語研究が盛り上がりを見せた1990年代前半より後に世に出されたことが関係していると考えられる。その後、環北太平洋地域を対象とする日本人の言語学者たちは、話者が存命で現地調査ができるうちにとフィールドに足繁く通い、記述研究に没頭してきた。そのため、相互に成果を共有し合いながら、この地域の諸言語の歴史的関係を解明するという総合研究に着手するには至っていない。フォーテスキューはその間に、ほぼ単独で広範な地域の膨大な数の言語データと格闘していたのである。

フォーテスキューがカバーしてきた言語は、旧大陸側は、西からウラル語族、ユカギール語族、チュクチ・カムチャツカ語族、ニヴフ語、新大陸側は、北からエスキモー・アリュート語族、ワカシュ語族まで及ぶ。このうち、エスキモー・アリュート語族 (Fortes-

cue, Jacobson, and Kaplan 1994), チュクチ・カムチャツカ語族 (Fortescue 2005), ニヴフ語 (Fortescue 2016), ワカシュ語族 (Fortescue 2007) については比較辞書を刊行している。カバーする領域も、形態音韻論から意味論まできわめて広範にわたり、歴史比較言語学、地域類型論といった多様な方法論やアプローチを駆使している。これらの広範な研究に一貫しているのは、ベーリング海峡兩岸の言語関係に対する氏の深い関心とその解明に向けた情熱である。

これらの研究の中で、チュクチ・カムチャツカ語族は、隣接するエスキモー・アリュート語族と比較されることが最も多いが、その他にも、北米ではコユコン語 (Koyukon: ナ・デネ語族)、クリー語 (Cree: アルゴンキン語族)、北東アジアではニヴフ語との比較研究もおこなわれている。また、複統合性 (Fortescue 2013)、能格性 (Fortescue 1997)、補助動詞 (Fortescue 2009) などのテーマが取り上げられている。このうち、フォーテスキュー (Fortescue 2013) の環北太平洋地域諸言語の複統合性の新旧についての議論については、呉人 (2020b) がチュクチ・カムチャツカ語族の面から再検討している。

氏のこれらの研究の一つの到達点を示すのが、‘Uralo-Siberian’の相互関係を考察した著作 (Fortescue 1998) である。

以下ではまず、フォーテスキュー (Fortescue 1998) の言う ‘Uralo-Siberian’ 仮説を概観する。‘Uralo-Siberian’ には、次の言語・語族が含まれる。

- (a) ウラル語族 (フィン・ウゴル語派, サモエド語派)
- (b) ユカギール語
- (c) エスキモー・アリュート語族
- (d) (チュクチ・カムチャツカ語族)

このうちチュクチ・カムチャツカ語族は、他の (a)-(c) の相互関係に比べると蓋然性が低いとして、カッコつきになっている。フォーテスキュー (Fortescue 1998) はこの4つの言語・語族をまとめる ‘Uralo-Siberian languages’ が系統関係のある「語族 (stock)」であるとは断言してはいないものの、その一方で、極北地域の大部分の言語が生じた、特定の類型的特徴を示す古代 ‘Uralo-Siberian’ の「網 (mesh)」の実在性の証明には近づいたとしていることから、相互の深い関係の可能性を念頭に入れていることは明らかである。ちなみに、フォーテスキュー (Fortescue 1998) はこれらの言語が周辺の他言語と明らかに区別される特徴のひとつに、無声閉鎖音 (/p//t//k/) と有声閉鎖音 (/v//ð//ɣ/) という稀少な対立を挙げている。

フォーテスキュー (Fortescue 1998) の採用する方法論は、歴史比較言語学的なアプローチと言語類型論的なアプローチの統合である。具体的には、できるかぎり前者のアプローチを採用し、それが同系性を証明するには不十分である場合に、後者のアプロ

チを補完的に採用する。その際、重要なのは、個々の類型的特徴ではなく、類型的特徴の束 (bundle) であるとする。すなわち、ユニークな類型的特徴の束を共有することにより、遠い関係の可能性を辿る道が開けると考えるのである。

フォーテスキュー (Fortescue 1998) はこの地域の歴史的言語関係を探るための類型的特徴として、44項目を取り上げ、言語地理学的手法によりその有無を地図上に示している。音韻的特徴は (6)、形態的特徴は (7)、統語的特徴は (8) で示す通りである。形態的特徴と統語的特徴はしばしば切り離しがたく、分類は恣意的な部分もあるが、明らかに構文に関する特徴のみ、(8) に分類する。

- (6) 【音韻】 子音連続・単音節語幹、二重母音・長母音、放出音・閉鎖音、前舌円唇母音・シユワ、語頭・母音間の /ŋ/, 語頭の /p/, 語頭・母音間の /r/, 語頭の /s//c/, 語頭の共鳴音、硬口蓋音の系列、音韻的 /q/・声門閉鎖音、語幹内部アブラウト、強勢、声調、無声摩擦音・側面音、母音調和、母音体系 (17項目)
- (7) 【形態】 独立した品詞としての形容詞、逆受動・不定目的語接辞、補助動詞、接辞あるいは異根による複数動詞、能格、属格・対格標示、1人称複数包括形／排除形、名詞抱合、分詞に基づく直説法、形態的使役・形態的充当相、証拠性・態度を表わす接辞、形態的受け身・反転動詞、非定形動詞による従属節、名詞類別・類別動詞、数接辞、所有接辞、接頭辞 vs. 接尾辞、前置詞 vs. 後置詞と場所格システム、語幹重複、直説法における時制の合成、自動詞 vs. 他動詞パラダイム (21項目)
- (8) 【統語】 コピュラ構文、HAVE 構文、主要部／属部標示、名詞句の語順、switch reference と再帰所有、語順 (6項目)

フォーテスキュー (Fortescue 1998) は、極北・亜極北地域の歴史的な言語関係を解明するためにこれらの類型的特徴を選んだ理由として、‘Uralo-Siberian’ としてまとめる根拠を示すことができるほどに珍しいものであるが、非常に局所的な発展を反映しているほど特異なものではないとしている。また、いずれの特徴もすべて、大規模な地域特徴としてか、深い系統関係を示す歴史的な標識としてか、あるいはより局所的な拡散や基層の効果の痕跡としてかはともかく、今日の状況に何らかの影響を与えているようなものであるともしている。一方、グローバルな連続体の一部を形成していたり、地域の内外で統計的に非常によく見られるような特徴は挙げていないとする。

以下では、これら44の類型的特徴の中から、コリヤーク語について再検討の余地があると思われる3つの特徴、すなわち、形容詞、非定形動詞による従属節、語順を取り上げ、考察を加える。フォーテスキュー (Fortescue 1998) は、類型的特徴の議論に続き、

歴史的再構を試みているが、本論文では紙幅の関係上、そこまでは踏み込まない。

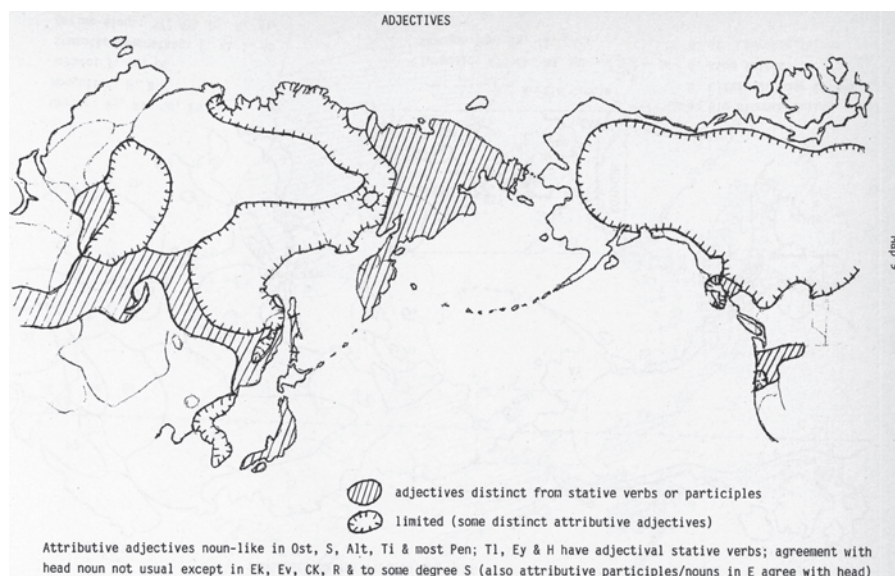
5 類型の特徴の検証

5.1 独立の品詞としての形容詞

地図2は、北東シベリアから北米地域に独立の品詞として形容詞が存在するかどうかの分布を示したものである(地図2)。

‘Uralo-Siberian’の特徴としては、形容詞として屈折する独自の形式の欠如が挙げられるが、フォーテスキュー (Fortescue 1998) によれば、その中でチュクチ・カムチャツカ語族、ケット語、ペヌーティアン語族だけは、独立の形容詞の形式を持つという。また、この形式は統語的には述語的機能だけを持ち、名詞修飾機能は持たないという。フォーテスキュー (Fortescue 1998) がいうチュクチ語の形容詞を形成する接周辞とは、n-:qin/-qen (以下、「N形」とする) である。コリヤーク語でも同じ形式があり、形容詞のひとつ、性質形容詞を形成する接辞とみなされてきた (Zhukova 1972)。

まず、N形が形容詞独自の屈折をするかどうかについて検証する。このことを考える際には、N形が名詞的か動詞的かという議論があることを押さえておく必要がある。すなわち、スタッセン (Stassen 2005) によれば、北東シベリアには動詞の形容詞を持つ言語と非動詞的 (= 名詞的) 形容詞を持つ言語が混在している。ユカギール語やニヴフ語などの形容詞が動詞の性格を示す一方で、ツングース語族の形容詞は名詞的性格を示



地図2 形容詞
(出典：Fortescue 1998 の Map 9)

す。チュクチ・カムチャツカ語族の形容詞も名詞的であるとする。一方、松本（2007）はチュクチ語の形容詞は用言的（＝動詞的）と考えている。両者のこのような見解の違いは、それぞれが念頭においている根拠の違いによるものであると考えられる。すなわち、スタッセン（Stassen 1997）は、N形は形態的に名詞述語同様に屈折することから、名詞的であり、n-の部分は名詞化接頭辞であるとする。一方、松本（2007）は明確には述べていないものの、N形が動詞の屈折体系に組み込まれていることから、動詞的であるとしていると推測される。

スタッセン（Stassen 1997）の言う通り、N形は述語として用いられる場合には、名詞述語と同様に人称接尾辞により屈折をする。(9)はコリヤーク語の例であるが、チュクチ語でも基本的には同様のふるまいを示す。

(9)	N形		名詞	
1 単主	n-ə-mejŋ-ə-jyəm	「私は大きい」	en'pici-jyəm	「私は父親だ」
1 双主	n-ə-mejŋ-ə-muji	「私達2人は大きい」	en'pici-muji	「私達2人は父親だ」
1 複主	n-ə-mejŋ-ə-muju	「私達は大きい」	en'pici-muju	「私達は父親だ」
2 単主	n-ə-mejŋ-ə-jyɛ	「君は大きい」	en'pici-jyi	「君は父親だ」
2 双主	n-ə-mejŋ-ə-tuji	「君達2人は大きい」	en'pici-tuji	「君達2人は父親だ」
2 複主	n-ə-mejŋ-ə-muju	「君達は大きい」	en'pici-muju	「あなた達は父親だ」
3 単主	n-ə-mejəŋ-qin	「彼は大きい」	en'pic	「彼は父親だ」
3 双主	n-ə-mejəŋ-qine-t	「彼ら2人は大きい」	en'pici-t	「彼ら2人は父親だ」
3 複主	n-ə-mejəŋ-qine-w	「彼らは大きい」	en'pici-w	「彼らは父親だ」

さらに、N形は述語機能だけでなく、名詞修飾機能も持つ。名詞を修飾する場合には、N形は単数形 n-..qin/-qen, 双数形 n-..qine-t/-qena-t, 複数形 n-..qine-w/-qena-w を区別し、n-tuj-qin ʃojacek 「若い男」(単数), n-tuj-qine-t ʃojaceka-t 「若い二人の男」(双数), 複数形 n-tuj-qine-w ʃojaceka-w 「若い男たち」(複数) のように主要部名詞との一致を示す。なお、N形と主要部名詞との前後関係は固定していない。次の(10)(11)の例を見られたい。

(10)	emfuqun	ŋanko	cowqoc	n-ə-pəttŋ-qen	ko-tva-ŋ.
	so	there	sovxoz (ABS,SG)	N-E-rich-QIN (ABS,SG)	IPFV-exist-IPFV
	「だから、そこにはとても豊かなソフホーズがあった」				

- (11) to qejmen ano-k jaja-pel'l'aq-o n-ə-ppul'u-qine-w
 and once spring-LOC house-DIM-ABS,PL N-E-small-QIN-ABS,PL
 na-ko-tajk-ə-ŋvo-ŋ-ə-naw.
 INV-IPFV-make-E-HAB-IPFV-E-3PL.O
 「それからある時、春に小さなユルトをいくつも建てていた」

ただし、名詞を修飾する場合、N形は絶対格でしか現れることができないという制限がある。つまり、(12a)のように斜格を取ることができない。斜格の出現は、(12b)のように語幹が主要部名詞と合成されることにより可能になる。

- (12a) *n-ə-mejŋ-qine-k jaja-k t-ə-ko-tva-ŋ.
 N-E-big-QIN-LOC house-LOC 1SG,S-E-IPFV-exist-IPFV

- (12b) mejŋ-ə-jaja-k t-ə-ko-tva-ŋ.
 big-E-house-LOC 1SG,S-E-IPFV-exist-IPFV
 「大きな家に私はいる」

以上から、N形は形態的には制限はあるものの、スタッセン (Stassen 1997) の言う通り名詞的であると言える。フォーテスキュー (Fortescue 1998) の他の品詞とは関係のない独自の形容詞としての屈折形式であるとする見解は支持できない。

一方、松本 (2007) がN形を動詞的であるとしたのは、チュクチ語ではN形が動詞の屈折体系に組み込まれているためであると推測される。N形は、たしかに形容詞語幹だけでなく、動詞語幹とも生産的に共起しうる (表2の網掛け部分)。

一方、コリヤーク語のN形は動詞の屈折体系には組み込まれてはいない (Zhukova 1972)。しかし、N形が動詞語幹から生産的に作られると言う意味では、チュクチ語となんら変わらない (e.g. n-ə-palomtel-qen 「注意深い」< palomtel 「耳を傾ける」, n-ə-java-qen 「使える」< java 「使う」)⁶⁾。さらに、N形は名詞語幹や副詞語幹からも作られる (n-ə-muqe-qin 「雨が多い」< muqe 「雨」, n-inŋe-qin 「早い」< inŋe 「早く」)。

N形の本性は、時間の流れに沿って一時的に生起する出来事や動作や状態を叙述する

表2 チュクチ語自動詞 jet 「来る」の直説法 (3人称単数主語) の屈折形式

	非未来		未 来
	発話時点との関係性なし	発話時点との関係性あり	
完 了	ye-jet-lin	Ø-jet-γʔi	re-jet-γʔe
不完了	nə-jet-qin	Ø-jetə-rkən	re-jetə-rkən

(出典: Nedjalkov 1994: 281に基づき筆者作成)

事象叙述 (event predication) に対して、時間を超越したモノの属性を表わす属性叙述 (property predication) 専用形式であることにありと考えられる (呉人 2010)。そのため、N 形は「今」「昨日」「明日」といった限定的な時間副詞とは共起しえない。たとえば、動詞語幹 ewji 「食べる (自)」から形成された N 形 (13a) は、「よく食べる (= 健康家、食いしん坊だ)」という属性を表わすため、(13b) のように ecyi 「今」のような時間副詞とは馴染まない。これを、一時的な状態を表わす事象叙述として表わしたい場合には、動詞の不完了相 ku-/ko-.-ŋ (以下、「KU 形」) に交替すればよい (13c)。

(13a) ənno n-ewji-qin
 3ABS,SG N-eat-QIN
 「彼／彼女はよく食べる (= 健康家だ)」

(13b) *ecyi ənno n-ewji-qin.
 now 3SG,ABS N-eat-QIN

(13c) ecyi ənno k-ewji-ŋ.
 now 3SG,ABS IPFV-eat-IPFV
 「今、彼／彼女が食べている」

このような交替は、動詞だけでなく、形容詞、名詞、副詞語幹のいずれでも可能である。以上から、N 形は次のようにまとめられる。

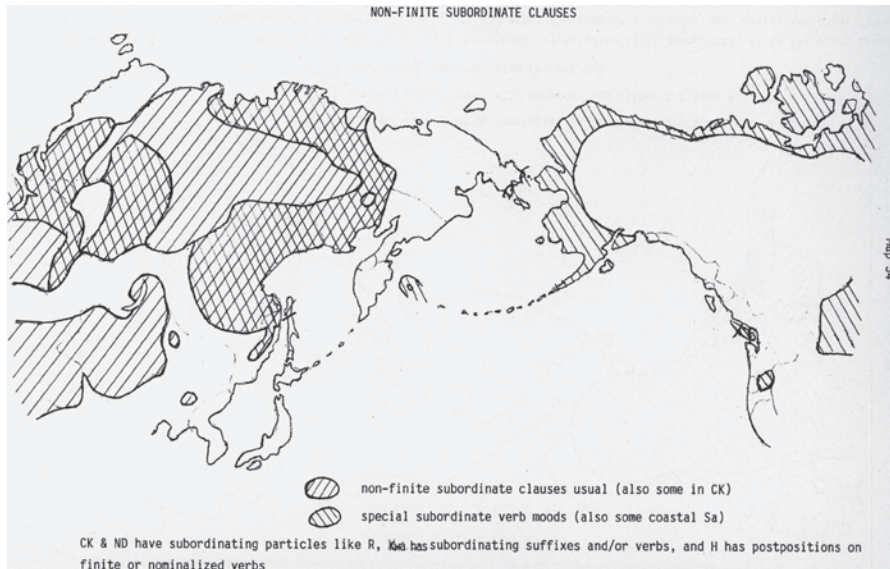
- 1) 形容詞、名詞、副詞、動詞語幹から作られる。
- 2) 形態的には名詞的である。
- 3) 統語的には述語機能と名詞修飾機能を担う。
- 4) 叙述のタイプとしては、事象叙述に対立する属性叙述を担う。

このような特徴を持つ N 形を、「形容詞」とみなしてよいかどうかは俄かに判断はできない。とはいえ、もし N 形を地図 2 に位置づけようと言うならば、少なくともチュクチ・カムチャツカ語族の斜線部分は外す必要があるであろう。

5.2 非定形動詞による従属節

地図 3 は、非定形動詞によって従属節が形成される言語の分布を示したものである。

非定形動詞によって従属節が形成されるのが一般的な言語は右上から左下への斜線、動詞が従属節のムードを持つ言語は左上から右下への斜線が示している。



地図3 非定形動詞による従属節
(出典：Fortescue 1998 の Map 3)

フォーテスキュー (Fortescue 1998) は、アジア側では唯一、チュクチ・カムチャツカ語族だけが関係節を例外にして、非定形動詞による従属節も、動詞のムードにより表わされる従属節も持たず、通常は、接続詞と定形動詞により従属節が表わされるとしている。チュクチ・カムチャツカ語族の部分が空白になっているのはそのためである。

しかしその指摘に反して、チュクチ語、コリヤーク語では実際には、非定形動詞、すなわち、動詞語幹に格接辞を付加することにより副詞節が作られる。これについては、呉人 (Kurebito 2012; 呉人 2016) がコリヤーク語について詳しく論じているが、その骨子をまとめると、次の通りである。

コリヤーク語には、接続詞と定形動詞で作られる副詞節がある一方で、非定形動詞によっても副詞節が作られる。まず、接続詞と定形動詞によって作られる例を挙げる。(14) は原因節、(15) は条件節の例である。[] で囲まれた部分が副詞節である。なお、副詞節と主節の前後関係は固定していない。

- (14) en`pici-t ko-wajolʃan-ŋəvo-ŋ-e ʔəmke-kjit, [məjew
father-ABS,DU IPFV-be,afraid-HAB-IPFV-3DU,S 1SG-CAS because
əcy-in ŋənvəq kəmiŋ-u təʃəl-ə-k veʃ-ə-la-j].
3PL-GEN many child-ABS,PL sickness-E-LOC die-E-PL-PFV

「両親は子供たちがたくさん病気で死んでしまったので、私のことを心配している」

表3 名詞化・非名詞化タイプで用いられる格接辞と副詞節の種類

タイプ	形式	格	時間節	目的節	原因節	条件節	様態節	引用節導入
名詞化	-kena-jtəŋ	方向	○					
	-nv-etəŋ	方向		○				
	-nv-ə-ŋ	与		○				
	-nv-ə-k	場所		○				
非名詞化	-k	場所	○		○	○		
	-e/-a/-te/-ta	道具			○		○	
	-ŋ	与					○	○
	-ma	共同	○					
	ye-/ya-/yejqə-/yajqə- -e/-a/-te/-ta	随	○					

(出典：呉人 2016: 13)

- (15) [ekilu meki je-ketyucfet-ə-ŋ] to ŋellə
 if who (ABS,SG) FUT-be.stronger-E-FUT and herd (ABS,SG)
 j-ekmin-ŋ-ə-nin cimqəp.
 FUT-take-FUT-E-3SG,O partially
 「もし誰かがより強ければ、その人が群れの半分を取るだろう」

一方、非定形動詞により副詞節を形成する方法には、2種類ある。1つは、動詞語幹が名詞化を経て格接辞を取る方法であり、もう1つは、名詞化を経ずに動詞の裸語幹がそのまま格接辞を取る方法である。便宜的に、前者を「名詞化タイプ」、後者を「非名詞化タイプ」と呼ぶ。それぞれで用いられる格接辞と副詞節の種類は表3の通りである。

(16) (17) は名詞化タイプの例である。(16) は属格+方向格 -kena-jtəŋ による時間節、(17) は「場所」+与格 -nv-ə-ŋ による目的節の例である。

- (16) [ecy-at-kena-jtəŋ] kocira-tko-la-j, ujŋe e-jəlqet-ke.
 bright-VBL-GEN-ALL card-VBL-PL-PFV not NEG-sleep-NEG
 「彼らは夜が明けるまで、寝ずにカードをやった」

- (17) jəqmitiw k-ena-n-ə-kj-aw-ŋəvo-ŋ,
 in.the.morning IPFV-1SG,O-CAUS-E-wake.up-CAUS-HAB-IPFV
 [mely-at-ə-nv-ə-ŋ].
 fire-VBL-E-place-E-DAT
 「朝、彼／彼女は火を焚くために私を起こす／していた」

一方、(18) (19) は、非名詞化タイプの例である。(18) は動詞の裸語幹に場所格接辞がついて目的節が作られる例である。(19) は動詞の裸語幹に同じく場所格接辞がつい

て原因節が作られる例である。いずれも接続詞は義務的ではない。

- (18) [(məjew) γəm-nin lewət təfəl-ə-k], vetat-ə-nv-etəŋ
 because 1SG-GEN head (ABS,SG) ache-E-LOC work-E-place-ALL
 ecyi qəjəm m-ə-lqət-ə-k.
 today not 1SG,S.OPT-E-go-E-1SG,S.OPT
 「私は頭が痛いので、今日は仕事には行かない」

- (19) [(ekilu) kəmiŋ-ə-n γətsev-ə-k], to ewənfət ənno
 if child-E-ABS,SG get.hungry-E-LOC and anyway 3SG.ABS
 ja-tejŋ-ə-ŋvo-ŋ.
 POT-cry-E-INH-POT
 「子供はもしお腹がすいたら、泣き出すだろう」

このような非名詞化タイプは、格接辞は名詞語幹に付加されるという規則から逸脱した特殊な用法である。ところで、このような非名詞化タイプの副詞節の形成は、実はチュクチ語やコリヤーク語だけに見られるものではない。アンダーソン (Anderson 2006) によると、シベリア諸言語の格接辞による従属節化のタイプには、①名詞化タイプと、②非名詞化タイプの2つがあり、次のような言語がそれぞれのタイプに該当する。

① 名詞化タイプ

チュルク語族、モンゴル語族、ツングース語族、ニヴフ語、ユカギール語族、チュクチ・カムチャツカ語族、オビ・ウゴール諸語、サモイェード諸語

② 非名詞化タイプ

- 1) 裸動詞語幹+格標識：チュクチ・カムチャツカ語族、ユピック語、ユカギール語族
- 2) 半定形動詞+格標識：北サモイェード諸語、イエニセイ語族
- 3) 定形動詞+格標識：イエニセイ語族 (ケット語、ユグ語)

それによれば、ユピック語 (エスキモー・アリュート語族) やユカギール語にも裸動詞語幹に格標識がつく非名詞化タイプが見られる。このうち、ユカギール語がこの非名詞化タイプを示すかどうかは、名詞化接辞の脱落現象がしばしば起きることから判断が難しいことは、呉人 (2016) で述べた通りである。ユピック語 (Central Siberian Yupik) では、コリヤーク語同様、名詞化、非名詞化いずれのタイプも見られる。ユピック語は、北米側ではセント・ローレンス島、ロシア側ではチュコトカ半島と両大陸にまたがって

分布する。(20) は名詞化タイプの例である。

- (20) neneghmeng taaqegkumta kiighqughlleqanka,
negh-negh-meng taaqe-kumta kiighqugh-lleqe-anka
eat-act.of.V-ing-MDs finish-CDO (1p) split-FUT-IND (1s-3p)
‘I’ll cut them (fish) after we eat (i.e. when we finish eating).’
(de Reuse 1994: 57)

一方で、非名詞化タイプの例も見られる。デ・リユース (de Reuse 1994) によれば、粗野で下品でインフォーマルな形式であると考えられているという。デ・リユース (de Reuse 1994) からは、絶対格、関係格、場所格、奪格、方向格、等格がついた例が確認される。(21) は場所格が時間節を表わす例、(22) は方向格が目的節を表わす例である。(23) は様態格による様態節、(24) は奪格による様態節の例である。(21) (22) はセント・ローレンス島のユピック語、(23) (24) はチュコト半島のユピック語の例である。

- (21) neqangisagllagmi
neqa-(ng)isag-ghllag-mi
food-lack.N-V.in.a.big.way-LCs
‘in a time of famine’
(de Reuse 1994: 36)

- (22) aghallegtam aghaliitaanga naasqiemnnun.
aghallegh-m agha-ligh-(u)te-aanga naasqugh-iqe-mnun
doctor-RLs medicine-provide.with.N-TR-IND(3s-1s) head-for.N.to.ache-TM (1s-s)
‘The doctor gave me medicine for my headache.’
(de Reuse 1994: 38)

- (23) kiitiqag ellmi tuungminun
kiitigh-kagh-Ø ell-mi tunge-minun
wound.by.bullet-one.that.has.been.V-ed-ABS PN-RL(3R) vicinity-TM(3Rs)
kaasimaaq aaghhwmeng.
kaate-(i/u) ma-ug aaghhw-meng
arrive-PST-IND(3s) crawl-MDs
‘The shot person arrived crawling to his own side.’
(de Reuse 1994: 37)

- (24) ellngit aklumatun kiyaghsimaat.
 ell-(ng) it aklu-(i/u) ma-tun kiyaghte-(i/u) ma-ut
 PN-AB(3p) be.in.need-PST-EQs live-PST-IND(3p)
 ‘They lived in poverty.’

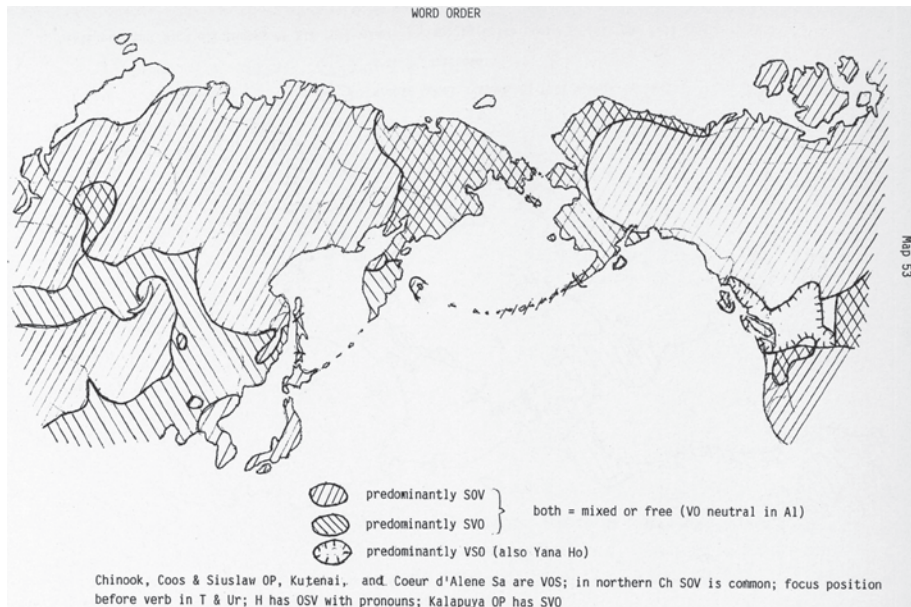
(de Reuse 1994: 39)

ちなみに、ロシア側の同じくエスキモー・アリュート語族に属するナウカン語でも、動詞語幹に道具格接辞が付加された形式が動作の様態を表わす副詞的な意味を、与格接辞が付加された形式が目的を表わすことが報告されている (Menovshshikov 1975)。

非名詞化タイプは、ロシアと北米にまたがって分布するユピック語やロシア側に分布するナウカン語にのみ見られることから、隣接するチュクチ・カムチャツカ語族との接触で獲得されたという可能性が浮上する。とはいえ、格接辞が動詞の裸語幹に直接、付加されるという不規則がなぜ起きているのかは、明らかではない。

5.3 語順

地図4は、基本語順の分布を示したものである。フォーテスキュー (Fortescue 1998) によれば、この地域にはSOV, SVO, VSOが認められるが、中でもSOVが優勢であるという。その中で、イテリメン語を除くチュクチ・カムチャツカ語族は、SOV, SVO両方



地図4 基本語順の分布地図
 (出典：Fortescue 1998 の Map 53)

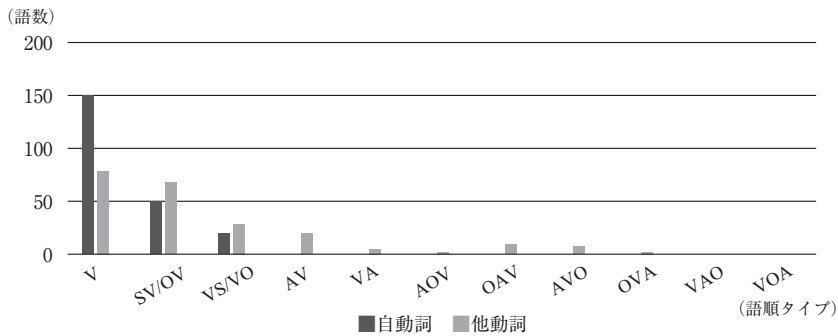


図1 チュクチ語の自動詞文、他動詞文における語順の出現頻度 (出典：Dunn 1999: 81)

を示す混合的あるいは自由な語順を示すと言う。また、このうち、SVOタイプは、接頭辞の獲得と並行して、比較的新しく発達したものであろうとしている。

ダン (Dunn 1999) は、チュクチ語の語りのテキストに出現する平叙文の自動詞文217例と他動詞文223例について語順のタイプの出現頻度を調べ、図1の結果を得ている(ただし、それぞれのタイプの正確な数値や割合は示されていない)。自動詞文、他動詞文両方を見るため、自動詞主語はS、他動詞主語はA、他動詞目的語はOとする。ダン (Dunn 1999: 81) によれば、チュクチ語では名詞項を伴わずVのみで現れる例が最も一般的である。次に一般的なのが、動詞の前にSかOが来るSVとOVのタイプである。これにVSとVOのタイプ、さらにAV、VAが続く。一方、他動詞においてAとOが揃ったタイプの語順の頻度ははるかに低い。

ダン (Dunn 1999) は上の結果を踏まえ、次のように指摘している。

- A) チュクチ語は統語論的な語順ではなく、語用論的な語順を示す。
- B) 語順を決定する語用論的要因は、フォーカスである。フォーカスになりうる要素としては、①重要な新情報、②新しい(再活性化した)トピック、③対比がある。
- C) 自立名詞項S、A、Oは、トピックの場合には現れず、フォーカスの場合に現れる。
- D) ①②③を示す要素は、文の最初に現われる。

一方、筆者は、コリヤーク語の談話と民話のテキストである (Kurebito ed. 2014; 2016; 2017; 2018; 2019) を対象に、平叙文におけるS、A、Oの出現と語順を調べた。調査では、自動詞文1,763例、他動詞文1,702例を採集した。ダン (Dunn 1999) の採集例の約8倍であるが、図2に見るように、若干の順序の違いはあるものの、同様の傾向が観察される。

すなわち、コリヤーク語でもチュクチ語同様、自動詞文ではVが圧倒的に多く、次にSV、VSと続く。他動詞文ではV、OVが同程度の出現率を示し、次にVO、AVと続く。

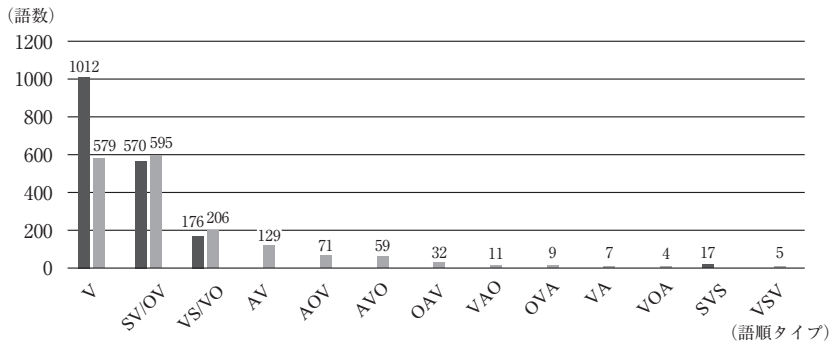


図2 コリヤーク語のテキストにおける自動詞文・他動詞文の語順の出現頻度

Vだけが出現する頻度が高いのは、動詞がS, A, Oの人称・数を標示し、S, A, Oが旧情報である場合には文中に出現する必要がないためである。たとえば、次の談話の流れを見られたい。談話の冒頭の文(25a)でSである「ハンターの男たち」が新情報として導入されると、次の他動詞文(25b)ではAに相当するそれは出現せず、Oの「熊」が新情報として導入される。さらに次の他動詞文(25c)ではすでに「ハンターの男たち」も「熊」も旧情報であるため、いずれも出現せず、文法関係は動詞の側でのみその人称が標示される。

(25a) ano-k əlw-ə-ŋejt-ə-lʁ-o qəlavol-o
 spring-LOC wild.reindeer-E-hunt-E-NML-ABS,PL man-ABS,PL
 ko-jal-la-ŋ.
 IPFV-come-PL-IPFV
 「春になるとハンターの男たちはやってくる」

(25b) kajŋ-ə-n ya-nm-ə-len.
 bear-E-ABS,SG FP-kill-E-3SG,O
 「熊を殺したのだ」

(25c) ne-ku-n-ciqc-ew-ŋ-ə-n.
 INV-IPFV-CAUS-prepare.for.worship-CAUS-IPFV-E-3SG,O
 「彼らはそれを叩う」

一方、A, Oが両方揃った語順パターンは全体の他動詞文の約11%にしかない。その中でもAOVがAVOをやや上回るものの、有意と言えるほどの差ではない。したがっ

て、チュクチ語同様、これら出現頻度の低い語順を基本語順として取り出し、他の文法的な語順を持つ言語と等しく比較することには、慎重であるべきである。

6 おわりに

本論文では、‘Uralo-Siberian’を提唱したフォーテスキュー (Fortescue 1998) が、この言語グループに特徴的として選定した44の類型の特徴の中から、形容詞、非定形動詞による従属節、語順の3つを取り上げ、フォーテスキュー (Fortescue 1998) の分析の妥当性を、コリヤーク語を例に検証した。以下、その結果をまとめると次の通りになる。

(a) 独自の品詞としての形容詞

フォーテスキュー (Fortescue 1998) は、N形は形容詞として独自の屈折を示す形式であるとしている。しかし、N形は形態的には名詞と似たふるまいを見せる。その意味では、北東シベリアの名詞的形容詞とも共通している。ただし、N形は事象叙述に対する属性叙述という特殊な機能を担っているため、これを「形容詞」という品詞の枠組みにあてはめてよいかどうかは判断が難しい。

(b) 非定形動詞による従属節

フォーテスキュー (Fortescue 1998) は、チュクチ・カムチャツカ語族では関係節以外、非定形動詞による従属節は作られないとしている。しかし、多様な副詞節が非定形動詞により作られる。具体的には、動詞語幹が名詞化を経て格接辞と結びつく「名詞化」タイプと、動詞の裸語幹が名詞化を経ずに格接辞と結びつく「非名詞化」タイプがある。同様のタイプがユピック語やナウカン語にも見られ、チュクチ・カムチャツカ語族からの影響関係の可能性が考えられる。

(c) 語順

フォーテスキュー (Fortescue 1998) は、チュクチ・カムチャツカ語族の語順は、SOVとSVOの混合型であるとする。しかし、データ分析によれば、そもそもチュクチ語でもコリヤーク語でも主語も目的語も揃った他動詞文の出現頻度は低く、チュクチ・カムチャツカ語族の語順には語用論的要因が働いていると考えられる。そのような語順を文法的な語順と同一の基準で論じることには慎重であるべきである。

本論文では、わずか3つの類型の特徴についてフォーテスキュー (Fortescue 1998) の分析の妥当性を検証しただけであるが、このように記述研究の立場から各類型の特徴を丁寧に解きほぐすことにより、フォーテスキュー (Fortescue 1998) のような大きな構

想に部分的にせよ修正を施す余地はあると考える。

【略語】

<コリヤーク語>

A=agent-like argument	ABS= absolutive	ALL=allative
CAS=causal	CAUS=causative	DAT=dative
DIM=diminutive	DU=dual	E=epenthetic
FP=fact predication	FUT=future	GEN=genitive
HAB=habitual	INH=inchoative	INV=inverse
IPFV=imperfective	ITR=iterative	LOC=locative
N-=n-	NEG=negative	NML=nominalizer
OPT=optative	O=object	PFV=perfective
PL=plural	POT=potential	-QIN=-qin
S=single argument	SG=singular	VBL=verbalizer

<ユピック語>

AB=absolutive	CDO=Conditional mood	EQ=Equalis case
FUT=future tense	IND=Indicative mood	LC=Localis case
MD=Modalis case	N=Noun base	p=Plural number
PN=pronoun	PST=Past tense	R=Restricted
RL=Relative case	s=singular number	TM=Terminalis case
TR=Transitivizing postbase	V=verb base	

謝辞

本論文は、国立民族学博物館共同研究「環北太平洋地域の先住民社会の変化、現状、未来に関する学際的比較研究—人類史的視点から」（代表：岸上伸啓）により令和2～3年度におこなった研究に基づき執筆した。研究にあたっては、岸上伸啓をはじめ、メンバーの皆様から研究会等を通じて貴重な助言やご教示を頂戴した。心から感謝の意を表したい。なお、本論文のコリヤーク語に関する考察は、科学研究費基盤研究B「北方危機諸言語の形成プロセスの解明に向けたネットワーク強化」（JP18H00665、代表：呉人恵）の調査研究に基づいている。調査に協力してくださった Ajatginina Tat'jana Nikolaevna 氏（1955年マガダン州セヴェロ・エヴェンスク地区第5トナカイ遊牧ブリガード生まれ、女性）には心より謝意を表したい。

注

- 1) Boas (1905: 95) が言う ‘the languages of northeastern Siberia’ は「古アジア諸語」に相当するため、以下ではその他のツングース系、チュルク系の北東シベリアの言語と混同しないように、「古アジア諸語」を用いる。
- 2) Skorik (1958) で示されていない語例やアリュートル語の語例は、Kurebito ed. (2001), Kibrik *et al.* (2004), Nagayama (2003), Zhukova and Kurebito (2004) から転載して補充する。その際、イテリメン語は北部方言の語例をあげる。
- 3) 子音について若干の補足説明をしておく。/j/ と表記されている音は、コリヤーク語チャウチュヴァン方言やイテリメン語では硬口蓋摩擦音 [j], チュクチ語では硬口蓋接近音 [j̥] である。/r/ はチュクチ語でははじき音 [r̥] とされている一方 (Dunn 1999), アリュートル語に現れるのはふるえ音 [r̥] である (Kibrik *et al.* 2004)。コリヤーク語パラナ方言でも同様のふるえ音 [r̥] で現れる (Zhukova 1980)。
- 4) /k' nukeŋin/ に現われる [ʔ] は声門化を表わす。
- 5) 語幹を前後から挟んで、ひとつの意味・機能を表わす接辞。屈折接周辞 (e.g., ku-/ko-..ŋ 不完了相, ye-/ya-..(t)e/-(t)a 共同格) も、派生接周辞 (e.g., te-/ta-..ŋ 「作る」, ja-/je-..ŋ 「～したい」) もある。
- 6) 自動詞語幹から作られる場合には主語と、他動詞語幹から作られる場合には目的語と一致する。

参考文献

<和文>

遠藤史

1992 「北方の諸言語における動詞の人称標示」宮岡伯人編『北の言語—類型と歴史』pp. 165-177, 東京:三省堂。

小野智香子

2021 『イテリメン語文法—動詞形態論を中心に』札幌:北海学園大学出版会。

呉人恵

2010 「コリヤーク語の属性叙述—主題化のメカニズムを中心に」『言語研究』138: 115-147。

2016 「コリヤーク語の副詞節—名詞化タイプと非名詞化タイプ」『北方言語研究』6: 1-23。

2020a 「コリヤーク語チャウチュヴァン方言における3系列の母音調和」『アジア・アフリカ言語文化研究』100: 5-24。

2020b 「コリヤーク語の複統合性再考—その『新しさ』と人称スロットの特異性をめぐって」『北方言語研究』10: 41-59。

ベリョスキン, Y.

2009 「『渡鴉のアーチ』とコンピューター・データベース—ジェサップ調査以降百年の神話を比較する」谷本一之・井上紘一編『『渡鴉のアーチ』(1903-2002)—ジェサップ北太平洋調査を追試検証する』(国立民族学博物館調査報告 82) pp. 61-86, 大阪:国立民族学博物館。

松本克己

2007 『世界言語のなかの日本語—日本語系統論の新たな地平』 東京：三省堂。

宮岡伯人

1992 「環北太平洋の言語」 宮岡伯人編『北の言語—類型と歴史』 pp. 3-66, 東京：三省堂。

2009 「言語的『旧世界』としての環北太平洋」 谷本一之・井上紘一編『「渡鴉のアーチ」(1903-2002)—ジェサップ北太平洋調査を追試検証する』(国立民族学博物館調査報告 82) pp. 29-44, 大阪：国立民族学博物館。

宮岡伯人編

1992 『北の言語—類型と歴史』 東京：三省堂。

渡辺己

1992 「新旧両大陸の要—チュクチ・カムチャツカ語族」 宮岡伯人編『北の言語—類型と歴史』 pp. 147-163, 東京：三省堂。

<欧文>

Anderson, G. D. S.

2006 Towards a Typology of the Siberian Linguistic Area. In Y. Matras, A. McMahon, and N. Vincent (eds.) *Linguistic Areas: Convergence in Historical and Typological Perspective*, pp. 266-300. Houndmills: Palgrave Macmillan.

Aoki, H.

1968 Toward a Typology of Vowel Harmony. *International Journal of American Linguistics* 34 (2): 142-145.

Boas, F.

1905 The Jesup North Pacific Expedition. *Proceedings of the International Congress of Americanists*, 13th Session, pp. 91-100. Easton, PA: Eschenbach.

1929 Classification of American Indian Languages. *Language* 5(1): 1-7.

1933 Relationship between North-west America and North-east Asia. *Scientific Monthly* 28: 110-117.

Bogoras, W.

1922 Chukchee. In F. Boas (ed.) *Handbook of American Indian Languages* (Bulletin 40, Part 2), pp. 631-903. Washington DC: Government Printing Office.

Bybee, J. L.

1985 *Morphology*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.

Comrie, B.

1981 *The Languages of the Soviet Union*. Cambridge: Cambridge University Press.

de Reuse, W. J.

1994 *Siberian Yupik Eskimo: The Language and Its Contacts with Chukchi*. Salt Lake City: University of Utah Press.

Dunn, M.

1999 A Grammar of Chukchi. Ph.D. Thesis, Philosophy of Australian National University.

Fortescue, M.

1988 The Eskimo-Aleut-Yukagir Relationship: An Alternative to the Genetic/Contact Dichotomy. *Acta Linguistica Hafniensia* 21(1): 21-50.

- 1997 Eskimo Influence on the Formation of the Chukotkan Ergative Clause. *Studies in Language* 21(2): 369–409.
- 1998 *Language Relations across Bering Strait. Reappraising the Archaeological and Linguistic Evidence*. London and New York: Cassel.
- 2005 *Comparative Chukotko-Kamchatkan Dictionary* (Trends in Linguistics, Documentation 23). Berlin: Mouton de Gruyter.
- 2007 *Comparative Wakashan Dictionary*. Munich: LINCOM Europa.
- 2009 Analytic vs. Synthetic Verbal Constructions in Chukchi and West Greenlandic. In M. Tersis and M. A. Mahieu (eds.) *Variations on Polysynthesis: The Eskaleut Languages*, pp. 35–49. Amsterdam and Philadelphia: J. Benjamins.
- 2013 Polysynthesis in the Arctic/Sub-Arctic: How Recent Is It? In B. Bicke, L. A. Grenoble, D. A. Peterson, and A. Timberlake (eds.) *Language Typology and Historical Contingency. Festschrift fir Johanna Nichols* (Typological Studies in Language 104), pp. 241–264. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- 2016 *Comparative Nivkh Dictionary*. Munich: LINCOM Europa.
- Fortescue, M., S. Jacobson, and L. Kaplan
- 1994 *Comparative Eskimo Dictionary with Aleut Cognates*. Alaska: Alaska Native Language Center.
- Jochelson, W.
- 1904 The Mythology of the Koryak. *American Anthropologist* 6(4): 413–425.
- 1928 *Peoples of Asiatic Russia*. New York: American Museum of Natural History.
- Kibrik, A. E., S. V. Kodzasov, and I. A. Muravyova
- 2004 *Language and Folklore of the Alutor People* (ELPR Publication Series A2-042). Suita: Faculty of Informatics, Osaka Gakuin University.
- Krashennnikov, S. P.
- 1755a *Opisanie zemli Kamchatki*, Vol. 1. St Petersburg: Imperial Academy of Sciences.
- 1755b *Opisanie zemli Kamchatki*, Vol. 2. St Petersburg: Imperial Academy of Sciences.
- Kurebito, M.
- 2012 Adverbial Clauses in Koryak: Degrees of Subordination and the Five Levels. 『北方人文研究』 5: 71–94.
- 2017 Koryak. In M. Fortescue, M. Mithun, and N. Evans (eds.) *The Oxford Handbook of Polysynthesis*, pp. 832–850. Oxford: Oxford University Press.
- Kurebito, M. (ed.)
- 2001 *Comparative Basic Vocabulary of the Chukchee-Kamchatkan Language Family :1*. ELPR A2-011. Suita: Faculty of Informatics, Osaka Gakuin University.
- 2014 *Koryak Text 1*. Toyama: Faculty of Humanities, University of Toyama.
- 2016 *Koryak Text 2*. Toyama: Faculty of Humanities, University of Toyama.
- 2017 *Koryak Text 3*. Toyama: Faculty of Humanities, University of Toyama.
- 2018 *Koryak Text 4*. Toyama: Faculty of Humanities, University of Toyama.
- 2019 *Koryak Text 5*. Toyama: Faculty of Humanities, University of Toyama.
- Menovshshikov, G. A.
- 1975 *Jazyk Naukanskix Eskimosov*. Leningrad: Nauka.

- Nagayama, Y.
 2003 *Очерк грамматики алюторского языка*. ELPR A2-038. Suita: Faculty of Informatics, Osaka Gakuin University.
- Nedjalkov, V. P.
 1994 Tense-aspect-mood Forms in Chukchi. *Sprachtypologie und Universalienforschung* 47(4): 278-354.
- Skorik, P. Ja.
 1958 K voprosu o klassifikacii chukotsko-kamchatskikh jazykov. *Voprosy Jazykoznanija* 1: 21-35.
 1968 Chukotsko-kamchatskie jazyki. *Jazyki narodov SSSR*. Vol. 5 Leningrad: Nauka.
- Stassen, L.
 1997 *Intransitive Predication*. Oxford: Clarendon Press.
 2005 Predicative Adjectives. In M. Haspelmath, M. S. Dryer, D. Gil, and B. Comrie (eds.) *The World Atlas of Language Structures*, pp. 478-481. Oxford: Oxford University Press.
- Stebnitskij, S. N.
 1937 Osnovnye foneticheskie razlichija dialektov nymylanskogo (korjaskogo) jazyka. *Pamjati B. G. Bogoraza (1865-1936)*, pp. 285-306. Moskva and Leningrad: Izdatel'stvo ANSSSR.
- Swadesh, M.
 1962 Linguistic Relations across Bering Strait. *American Anthropologist* 64: 1262-1291.
- Thalbitzer, W.
 1952 Possible Early Contacts between Eskimo and Old World Languages. In S. Tax (ed.) *Indian Tribes of Aboriginal America: Selected Papers of the XXIXth International Congress of Americanists*, Vol. 3, pp. 50-54. Chicago: The University of Chicago Press.
- Voegelin, C. F. and F. M. Voegelin
 1965 Classification of American Indian Languages. *Anthropological Linguistics* (Part I: Languages of the World: Native America Fascicle Two) 7(7): 121-150.
- Volodin, A. P.
 1997 Chukotsko-kamchatkie jazyki. In A. P. Volodin (ed.) *Jazyki mira. Paleoaziatskie jazyki*, pp. 12-22. Moskva: Indrik.
- Worth, D. S.
 1962 La place du kamtchadal parmi les langues soi-disant paleosiberiennes. *Orbis* 6(2): 579-599.
- Zhukova, A. N.
 1968 Korjaskij jazyk. In P. Ja. Skorik (ed.) *Jazyki narodov SSSR. T. 5*, pp. 271-293. Leningrad: Nauka.
 1972 *Grammatika korjaskogo jazyka*. Leningrad: Izdatel'stvo Nauka.
 1980 *Jazyk palanskix korjakov*. Leningrad: Nauka.
- Zhukova, A. N. and T. Kurebito
 2004 *Bazovyj tematicheskij slovar' korjasko-chukotskix jazykov* (Asia and African Lexicon Series 46). Tokyo: Research Institute for Language and Culture of Asia and Africa, Tokyo Universtiy of Foreign Studies.